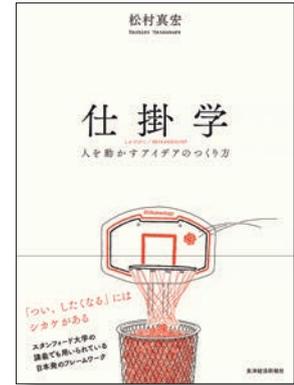


『仕掛学—人を動かすアイデアの作り方—』

松村 真宏 著

農業・農村領域 研究員 楠戸 建



『仕掛学—人を動かす
アイデアの作り方—』
著者／松村真宏
出版年／2016年
発行所／東洋経済新報社

近年、環境問題や社会問題が認知され、その解決に向けたアプローチが盛んに議論されています。この『仕掛学』という本は、解決すべき問題に対する多くのヒントを与えてくれるはずです。

本書は、もともと人工知能の研究者である著者が『仕掛け』に関する一連の研究を平易にまとめたものです。

本書では、まず『仕掛け』を公正性（誰も不利益を被らない）・誘因性（行動が誘われる）・目的の二重性（仕掛ける側と仕掛けられる側の目的が異なる）のすべてを満たすものと定義したうえで、それを用いた身近な問題から社会の大きな問題まで解決する様々な例を挙げています。

人々の行動を望ましい方向に変えてもらうことによって、社会問題の解決を試みる方法論の一つに、2017年にノーベル経済学賞を受賞したリチャード・セイラーらが提唱したナッジが注目を集めています。著者は、ナッジはあまり考えずに選ばれるいつもの行動の設計方法、仕掛けはつい選びたくなるもう一つの行動の設計方法であると述べており、人々の行動を「ついしたくなる」ような方向に導き、結果的に問題を解決するような様々な仕掛けを提示してくれています。

著者の提示してくれる多種多様な仕掛けの中で、ブックレビューを執筆している私のお気に入りとして、バスケットゴールのついたゴミ箱の例（本書の表紙にもなっている例）を挙げたいと思います。これは、ゴミが散らかっている場所で思わずゴミをゴミ箱に捨てたくなる、という仕掛けです。なるほど確かに、遊んでいるうちにゴミが片づけられるいいアイデアだ。と思うと同時に、ひねくれものの私は「シュートが失敗してゴミ箱の周りが散らかりそうだな」とも思ってしまいました。著者はそれを見透かしたように、こういった予想外のことが起こった

ときにどうすればよいかについて「予想外のことが起きたときは都度修正すれば良い。最終的には試行錯誤を繰り返すしかない」と回答をしてくれています。このような「～だったらどうしよう」という心配に対しても、最前線の研究者でさえ試行錯誤しており、まずはやってみることが大切であることが伝わってきます。

さらに著者は、アイデアを発想するときによく使われるものとして、『オズボーンのチェックリスト』を提示してくれています。チェックリストの内容は、ぜひ本書を手にとって確認していただきたいのですが、チェックリストを見ながら、筆者の提示してくれている仕掛けの数々をアレンジし、身近な問題の解決に向けた仕掛けを考えてみるのも面白いのではないのでしょうか。

ところで、このブックレビューのページがふと目に留まるように、私も一つ仕掛けを試してみたくなり実際にやってみました。それによって一人でもページをめくる手を止めてくれた方がいらっしやれば、私の仕掛けは大成功です。

ところで、このブックレビューのページがふと目に留まるように、私も一つ仕掛けを試してみたくなり実際にやってみました。それによって一人でもページをめくる手を止めてくれた方がいらっしやれば、私の仕掛けは大成功です。

なお、実際に仕掛けをやってみて、新たに一つのことに気づかせられました。それは、仕掛けた側には、読者の皆さんの手を止めさせたことに対してそれなりの責任が生ずるということです。今回の場合は、このページで手を止めてくれた読者に「この書評を読んだ時間も、まあ無駄ではなかったな」と思ってもらい、できるならば現実の問題の解決に向けた一助としていただくことですが、果たして。